様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　 ５ 月 １９ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2020
課題番号：１５Ｋ０２２９２

研究課題名（和文）英語圏および日本語の文学作品におけるポライトネスの機能

研究課題名（英文）The function of politeness in English and Japanese literature

研究代表者
阿部　公彦（ABE, Masahiko）

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・教授

研究者番号：３０２４２０７７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、主に対人的な場面で使われると考えられがちな「敬意」や「丁寧さ」の表現が、不特定多数に向けた書き言葉でも潜在的に機能し、とくに小説や詩などの語りの中で語りの装置として大きな役割を果たしていること、またテクストと読者の間に興味深い作用を及ぼしていることを明らかにした。このことによって、文学テクストもまた何らかの目的を持ち、また結果をも引き起こす一種の「行為」だということが確認され、かつ、その「行為」が読者やときには登場人物に対する「配慮」を伴うきわめて人間関係的なものとして遂行されていることも検証された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
ポライトネス研究はもともとは言語学と社会学、文学人類学などの学問分野をつなぐ形で発展してきたが、今回の研究はこれをさらに文学研究の領域に押し広げ、そのことを通して、さまざまな言説の中で潜在的に機能している書き手と読み手の間の関係性に新しい角度から光をあてることを可能にする。この研究の延長上で、公に流通している文書の適切なあり方を検討することが可能になるとともに、言語教育の現場にも示唆を与えることができると考える。

研究成果の概要（英文）：The aim of this project was to examine the function of politeness in the context of the narrator/reader relationship in literary texts. The idea of politeness has inspired cross-disciplinary investigations in linguistics, sociology and anthropology in the past decades, but quite often such approaches prioritize oral communication, with emphasis on concepts such as ' face' and 'distance'. In my research I tried to reveal that politeness is in operation even in written texts, particularly in literary works, where the attitude of the narrator could be seen as part of an attempt to stabilize relationships with the reader. Close readings show how the narrator tries to avoid offence and make the reader comfortable through various 'polite' behaviors, though sometimes deliberate 'impoliteness' is applied to create effects, too. The outcome suggests that more attention to politeness will deepen our understanding of the mechanism of written texts.

研究分野：人文学

キーワード：ポライトネス　英文学　日本文学　言語学　言語教育　英語教育

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## １．研究開始当初の背景

本研究の学術的背景としては、いわゆる「作法書」(Conduct Manuals)についての研究がまずはあげられる。英国では 17 世紀から 18 世紀にかけ「作法」の指南書を大陸から輸入する動きが活発になり、やがて国内でも同種のものが執筆されたという経緯があった。こうした作法書は個人の振る舞いや性格にかかわる具体例やエピソードを多用していたこともあって、近代小説の起源の一つとなった。そのあたりの事情は Norbert Elias, *The Civilizing Process*(1939)のような、「作法」という観念そのものの成り立ちを歴史的に概観した古典的な書物をはじめ、Jacques Carré, *The Crisis of Courtesy*(1994), Anna Bryson, *From Courtesy to Civility* (1998)などが参考になる。これらは作法書の歴史的意義を考察し、「作法」に対する意識の変化をたどったものである。あわせて作法書の古典としては Della Casa, *Galateo or The Book of Manners* (1578)、Antoine de Courtin, *The Rules of Civility* (1671)のように、影響力の大きかった出版物を精査する必要がある。

注目すべきは 17 世紀から 18 世紀にかけて作法書の焦点が「振る舞い」から「言葉」へと移ったということである。実際、18 世紀には Henry Fielding や Jonathan Swift といった文人たちが、英語の使用法をめぐって大いに発言している。文章の書き方や会話のやり方といった広く言葉にかかわる作法をめぐる意識の高さは、「洗練された英語」(Polite English)という表現がこの当時から頻繁に使用されるようになったという事情とあわせ、語りと作法の関係の緊密さを如実に反映している。そうした事情に触れた書物はすでにあげたものの他にたとえば Peter Burke, *The Art of Conversation*(1993)など多数ある。

ヨーロッパにおける作法書の起源をさかのぼってみると、そこには如実に身分差の意識がある。商業の発達や農業生産性の向上とともに富をたくわえた新興勢力が台頭し、旧来の封建的な身分性の枠組が崩れて流動化が生ずることになるが、宮廷など権力の中心をとりまく場での勢力図は旧来の身分制に影響されたままで、新興勢力にとっても乗り越えるのが難しかった。そうした状況で作法書は、まずは権力者や身分の高い者とどのように付き合うべきかを指南する書物として、きわめて実用的な価値をもったのである。そこで指南の中心となるのは、身分の高い者に対していかに失礼のないように振る舞うか、状況に応じた適切な態度を示すことでいかに寵愛を得るかといったことであり、当然「敬意」や「丁寧さ」や「配慮」の示し方が肝要となってくる。

しかし、時代が進むにつれ、このような権力に対する意識は次第に影を潜め、作法書の焦点は他者の前で自分がどのように振る舞うのが適切かという、より一般化された他者意識へと変じていく。言うまでもなくジェイン・オースティン、ジョージ・エリオット、トマス・ハーディなど 19 世紀英国小説を代表する作家たちの作品にも身分差の意識は依然として残っているが、同時に、会話などにおける言葉の使い方を中心に繊細な対他意識も表現されており、これが小説の語り手が持つ対読者意識とも重なってくるところが興味深い。

筆者はかねてより語りにあらわれたこうした微妙な態度の分析の必要性を感じており、すでに公にした『英語文章読本』（2010）、『英語的思考を読む』(2014)でも、語り手が読者に対して示す態度を、テクストの内容とからめて読解する必要を強調してきた。本研究はその延長上に位置するものであり、すでに「WEB 英語青年」で 2011 年から 2012 年にかけて連載した「善意と文学」という研究でもこの方面についての考察を進めてきた。

## ２．研究の目的

本研究で明らかにしようと試みたのは、こうした作法書の研究と、より一般的な他者への「配慮」をめぐる研究とを結びつければ、これまで十分に検討されてこなかった文学作品における「丁寧さ」の機能があきらかになるということだった。①であげた文献は歴史的経緯や背景に触れたものが中心となっていたが、本研究では作法を構造的にとらえる視点をもとりいれた。たとえば「ポライトネス理論」を打ち立てたことで有名な Penelope Brown and Stephen C.Levinson, *Politeness: Some universals in language usage*(1978)は、文化人類学的・社会学的・行動学的視点から「丁寧さ」をとらえなおしたもので、相手に対する配慮が一種の対他的な戦略として機能しているさまをシステマティックに記述しようとこころみている。そのまま応用するのは難しいにしても、その思考法からヒントを得ることはできると考えた。また、このポライトネス理論の日本における紹介者・実践者としても定評のある滝浦真人の一連の著述（『日本の敬語論』〈2005〉、『ポライトネス入門』〈2008〉、『日本語は親しさを伝えられるか』〈2013〉など）は、西洋語と日本語の橋渡しをしつつ、従来とかく日本独特のものと見られることの多かった「敬語」というシステムを、より普遍的な視点から再考しているという点で、本研究のめざす新しい語りの理論とも接点を持つ。

このような他分野の知見を応用することで、作品の語りの中にどのような対他的な意識が反映されているか、とくにそれが「丁寧さ」（ポライトネス）とのかかわりでどのような表現を与えられているかといった点がこれまでよりもはっきりと見えてくる。たとえば、アメリカの小説家 Nathaniel Hawthorne の *The House of Seven Gables*(1851)では、語り手が Phoebe という

女性の登場人物に対して、まるで遠慮するような、ほとんど恥じらうような言いよどみを示すことがある。こうした一見、ストーリー展開上の都合とは関係しないようなジェスチャーは、実は物語の真相にある世界観やひいては作家自身の生理的な特質、あるいはイデオロギーなどともかかわってくる。同様に、William Shakespeare の *Sonnets*(1609)でも、語り手はしばしばこの詩集で語りかけの対象となっている青年に対して、ためらいやいいよどみ、遠慮を示すが、こうした振る舞いについても語りの対他的なジェスチャーが示す戦略的な意味という観点から新しい解釈を示すことが可能となる。

３．研究の方法

本研究はテクストの読解を中心としたので、対象となる作品を傾向ごとにわけて年度計画を立てた。最初の２年は研究の土台を形成するために、語りの原理的な部分の検討を中心に行い、残りの３年（結果的には４年）では個別作品を詳細に検討することで具体的に方法論の成果を示した。最初の２年では資料収集に重点をおき、残りの３年では研究成果の公表を増やしていった。平行して他の研究者との意見交換や成果発表も行った。

４．研究成果

（１）本研究の最初の成果は、2015 年に出版した『善意と悪意の英文学史　―　語り手は読者をどのように愛してきたか』（東京大学出版会）である。この研究書では英文学史上にあらわれた「配慮」の痕跡を、いくつかのキャノニカルな作品を例に確認した。本書を土台とすることで、本研究では他者に対する「敬意」や「丁寧さ」を示す表現が、英語圏・日本語文学の作品の中でどのように機能しているか、またそうした語りの装置を通して、テクストと読者の間にはどのような関係性が生ずるかの検討を進めることができた。扱った作家としてはウィリアム・シェイクスピアからジェイン・オースティン、ルイス・キャロル、D・H・ロレンスなどイギリスの文学者に加え、ナサニエル・ホーソーン、ウォレス・スティーブンズ、ウィリアム・フォークナーなどアメリカの作家・詩人、また宮沢賢治や江戸川乱歩といった日本文学の作家にも範囲をひろげている。

『善意と悪意の英文学史』では、語るという行為が読者や世界に対して何らかの働きかけを目指した一種の「行為」だという考えを土台にすえている。その「行為」が読者やときには登場人物に対する「配慮」を伴うきわめて人間関係的なものとして遂行されていることも重要である。

このことからもわかるように、本研究はテクスト論や読書論から出発しながらも、より広く言語論、さらには文化論へと広がる射程を持つ。テクストを読むという行為は、他者によって提示されたテクスト戦略や読み方をめぐる「コード」との出会いを示唆するもので、だからこそ、そこにきわめて人間関係的な「配慮」の概念がからんでくる。テクストを読むことが、「異文化」との邂逅をはらんだ行為だと再認識することの意義は大きい。これまで見たこともない読みの体系をどのように消化し理解するかという点で、読むという作業ではつねに知の柔軟さが試されているのである。

その後も引き続き丁寧や配慮の概念を拡大的にとらえることで語りについての研究を進めることができた。その際に重要だったのは、語りというものがそもそも善意のエネルギーによって駆動されるという大前提をあらためて確認できたことである。一般的なコミュニケーション理論では、メッセージのやり取りに関して、情報がいかに効率的に伝えられているかという側面から検討されることが多かったので、そこにどのように情緒的な要素がからんでくるかを確認することに意味があった。とりわけ、利他的な善意や愛情が語りのベースにあるということは、一見、あまりに素朴に見える要素だけに、見落とされがちであった。この点を踏まえた上で、あらためて善意や愛情と不即不離の、冷淡さや無愛想、悪意といった要素についても精密に検討した。このことによって従来見られなかった観点からのテクストの分析が可能になっただけでなく、異文化との遭遇の場において何が起きているのかといったことに関しての考察も進めることができた。これを踏み台にすれば、近年インターネット環境の拡張に伴ってこれまで以上に問題となりつつある誹謗中傷やヘイトスピーチといった問題についても検討することができるだろう。

（２）こうした考察を踏まえて、研究の中盤では筆者はポライトネスと「言いよどみ」や「開放性」の問題についての研究を進めた。前者についてはさまざまな隠蔽がむしろ相手に対する「配慮」につながるという視点も加えることで、たとえばシェイクスピアの『ソネット集』における語り手と聞き手の関係についての考察を深めた。後者についてはジョージ・エリオットの作品におけるシンパシーの問題と結びつけることで、語り手がどのように登場人物に感情移入したり、その内面について踏みこんだ語りを行ったりするか、という点の考察を進めるとともに、こうした関係性にどの程度、読者が巻きこまれるかも検討した。またジョージ・エリオットについての考察を延長・拡大する形で、エリザベス・ギャスケルの作品を俎上にあげ分析を行った。

研究の成果については日本ギャスケル協会における招待講演「小説家の礼儀作法」において、登場人物の導入に際して、語り手の側にどのような「配慮」が働いているか、という観点から検討している（2017 年）。エリオットについては豊田昌倫・堀正広・今林修編『英語のスタイル』〈研究社、2017 年）に「文体に注意を払って読むとは？」という論考を寄稿し、発表することができた。こちらはエリオットの長文が、長文でありながら比較的スムーズに読者の頭に入ってくる点に注目し、「開放性」とシンパシーという観点から論じた。

本研究と並行して、筆者は国際シンポジウム「日本という壁」を主催したためにかなり準備に時間がとられ、遅滞も予想されたが、さいわいなことに「日本という壁」の準備にむけて自ら行った研究が、実際には本研究とも重なる部分が大きく、それほどの遅滞とはならずにすんだ。その研究とは、入試問題における設問の設定をきっかけに、そもそも国語や英語の入試では、一種の異文化との遭遇のモデルが基礎になって問いが立てられているとの仮説を立てたものである。この分析の材料としては実際の入試問題のほか、多和田葉子氏の『容疑者の夜行列車』『雲をつかむ話』などの作品もとりあげ、作品冒頭部で語り手が読者と出会う際の構造が、18 世紀から 19 世紀にかけての近代的な移動手段の進展に伴う「他者」との遭遇を彷彿とさせるような形になっていることをあらためて明るみにし、そもそも近代小説や入試問題には、類似したパラダイムが読み取れることを指摘したのである。

（３）この後の研究では二つの柱があった。一つは近代から現代にかけての文学作品の冒頭部にとくに注目し、そこに発生する「遭遇性」を分析対象とする研究である。作品冒頭においては、作者と読み手、語り手と聞き手、語り手と登場人物といったさまざまな関係性が形成されると同時に、そこでどのような約束事が必要とされるかが明るみになる。こうしたコードはどのようにして読み取られるのか、そこにはどのような普遍的な規則があるのか、といったことを調査、考察した。

もう一つの柱は、以前から研究者が注目していた「聞き取り」についての研究である。従来、英語教育では「リスニング能力」は比較的軽視される傾向があった。教室での英語教育がオーラル重視となった今も、漠然と「会話」という理念がかかげられているものの、「聞き取り」のもつ本質的な要素への切り込みはまだまだ十分とはいえない。筆者はこの時期の研究の二つめの柱として、この「聞き取り」問題についての考察を進め、それが異文化理解や小説的読解とどのように関係しているかを明らかにした。その成果として２０２０年に発表した『理想のリスニング　―　「人間的モヤモヤ」を聞きとる英語の世界』（東京大学出版会）があげられる。

「聞きとり」をめぐる研究は、ポライトネスと「誤差の修正」や「遭遇」についての研究として進展させることができた。前者についてはさまざまな配慮が相手と共同で言説を組み立てる際に、どのような機能が生まれるかということについての考察を加えている。たとえばＥ・Ｍ・フォースターの『ハワーズ・エンド』における姉妹の会話などがその重要な手がかりとなる。

後者についてもフォースターの同作品が参考になる。異なる文化的背景を擁したシュレーゲル家とウィルコックス家が「遭遇する」ことで、どのようなポライトネスの契機が生ずるかを、テクスト上に見られる「常識」の変遷を確認することで、具体的に考察することができるとともに、さらに一般化して、異なる文化間のまじわりの問題としても総合化することができるかが明らかになった。このあたりの成果は、日比谷図書館で行われたワークショップなどで一般にむけた解説として発表することができたし、雑誌「すばる」掲載の「小川洋子論」を通してもより一般化された議論として発表した。

本研究の最終段階では、さまざまな英語教育関係者との議論を通して、会話とは何か、配慮とは何か、そもそもコミュニケーションとは何かといったことについて考察を進めたことがとても有益だった。とくに 2018 年 2 月 10 日に行われたシンポジウム「大学入学者選抜における英語試験のあり方をめぐって」では、2020 年から予定されている大学入試の変更についてのかなり突っ込んだ議論を行うことで、言語習得やコミュニケーション鍛錬という視点から、ポライトネスについての考察を深められたと考えている。

国語や英語の入試では、一種の異文化との遭遇のモデルが基礎になって問いが立てられているとの仮説を昨年も立て、すでに触れたようにその成果をシンポジウム「日本という壁」で発表したわけだが、このシンポでの議論がやや文学に特化したものだったのに対し、２０１８年のシンポジウム「大学入学者選抜における英語試験のあり方をめぐって」ではその領域を広げ、文学に縛られない文化全般を含めるような、教養教育を視野にいれた。分析の出発点としては「そもそも発話とは何か」「言語表現とは何か」といった問いがあり、入試システムから逆算して、どのような教育が学校教育で行われるべきかといった課題をも検討した。

こうした成果を踏まえ、研究のまとめとしてはポライトネスと「誤読」や「遭遇」の問題についての研究を深めた。前者については口頭表現に近い文章表現の中でもさまざまな配慮が働き、「語り手と聞き手」「書き手と読み手」といったペアが共同で言説理解の作業を成就していく仕組みについての考察を進めた。その際の参考として、CEER の土台となっているコミュニカティブ・アプローチのモデルをも批判的に検討している。

筆者が上記アプローチに関連して問題にしたのは、口頭表現の「流麗さ」の過度な強調である。ポライトネスという視点を入れれば一目瞭然なのは、「立て板に水」の語りが決して戦略的に有効であるとは限らないということである。こうした規準や指標が言語運用能力の判断に際して安易に用いられてしまうのは、書かれた文章に比べると、口頭の発話に関する検討がまだまだ未熟であり、しばしば直感的な判断や文化的な背景に縛られた「思い込み」に依存せざるをえないことが要因として考えられる。

こうした問題も視野に入れながら、筆者は文学作品に関しては谷崎潤一郎や今村夏子の諸作

品のほか、とくに夏目漱石の『明暗』を俎上にあげ、明治大正期の言文一致体におけるポライトネスの機能について分析した。英文学の領域ではジェイン・オースティンにおける「のぞき」に注目することで言説の間接的な受容にも光をあてている。エミリー・ブロンテの『嵐が丘』についても、いわゆる「インポライトネス」という観点から考察をすすめた。

研究の成果については夏目漱石についてはNHKのEテレビで放送された「100分de名著　夏目漱石スペシャル」（全４回）で一般向けに公表することができた。その他、各地での講演を通して、日本語英語の比較を行いながらポライトネスに注目するという方法をとってきた。

国語にせよ英語にせよ、読解力の重要さはいくら強調してもしたりない。筆者がとりくんできたオースティン、ブロンテ、谷崎、漱石といった作家の文体の分析を通して見えてきたのは、人間の心を説明したり理解したりするプロセスの中で、いかに複雑なメカニズムが働いているかということである。このところの一連の入試騒動を通して「そもそも発話とは何か」「言語表現とは何か」といった問いに光があたったことにはとても意味があったと思われる。約束事が何もない環境の中で、人はどのように「約束」を形成するのか。そうやって形成されたコードはどのようにして読み取られるのか。そこにはどのような普遍的な規則があるのか。今後も考察をつづけるとともに、成果公表もこころみたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計14件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　0件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>阿部公彦 | ４．巻<br>4月号 |
| ２．論文標題<br>「森鴎外と事務能力　―　『渋江抽斎』の言葉と物」 | ５．発行年<br>2020年 |
| ３．雑誌名<br>『すばる』 | ６．最初と最後の頁<br>140-150 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>阿部公彦 | ４．巻<br>11月号 |
| ２．論文標題<br>「元純文学作家の職業意識」 | ５．発行年<br>2019年 |
| ３．雑誌名<br>『群像』 | ６．最初と最後の頁<br>283-288 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>阿部公彦 | ４．巻<br>13号 |
| ２．論文標題<br>「「不機嫌」と「のぞき」から読む近代小説　――　ジェイン・オースティン『高慢と偏見』を中心に」 | ５．発行年<br>2019年 |
| ３．雑誌名<br>『ジェイン・オースティン研究』 | ６．最初と最後の頁<br>1‐22 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>阿部公彦 | ４．巻<br>5月号 |
| ２．論文標題<br>「『読解力が危機だ！』論が迷走するのはなぜか？　――『読めていない』の真相をさぐる」 | ５．発行年<br>2019年 |
| ３．雑誌名<br>『現代思想』 | ６．最初と最後の頁<br>136-154 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>阿部公彦 | 4．巻<br>20号 |
| 2．論文標題<br>「主観共有の誘惑――フォークナーから谷崎潤一郎、今村夏子まで」 | 5．発行年<br>2018年 |
| 3．雑誌名<br>『フォークナー』 | 6．最初と最後の頁<br>97-112 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>阿部公彦 | 4．巻<br>2018年5月31日 |
| 2．論文標題<br>「「スピーキング幻想」が生んだ大学入試 “ 改悪 ”」 | 5．発行年<br>2018年 |
| 3．雑誌名<br>nippon.com (https://www.nippon.com/ja/currents/d00413/) | 6．最初と最後の頁<br>web |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>Masahiko Abe | 4．巻<br>なし |
| 2．論文標題<br>“ The Influence of English Literature and Language on Oe Kenzaburo, Murakami Haruki and other Japanese Novelists ” | 5．発行年<br>2018年 |
| 3．雑誌名<br>Oxford Research Encyclopedia of Literature | 6．最初と最後の頁<br>web |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.1093/acrefore/9780190201098.013.169 | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>該当する |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>阿部公彦 | 4．巻<br>2018年6月5日 |
| 2．論文標題<br>「なぜスピーキング入試で、スピーキング力が落ちるのか」 | 5．発行年<br>2018年 |
| 3．雑誌名<br>南風原朝和編『岩波ブックレット　検証　迷走する英語入試――スピーキング導入と民間委託』（岩波書店、2018年、105p+7） | 6．最初と最後の頁<br>69-88 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>阿部公彦 | 4．巻<br>2019年3月20日 |
| 2．論文標題<br>「アメリカ（1）ナサニエル・ホーソーン　『緋文字』を読む」、「アメリカ（2）ヘンリー・ジェイムズ　『ねじの回転』「密林の獣」『黄金の杯』を読む」、「ヨーロッパ近代文学を翻訳で読む楽しみ」 | 5．発行年<br>2019年 |
| 3．雑誌名<br>沼野充義・野崎歓編『ヨーロッパ文学の読み方――近代篇』（放送大学、2019年、260p） | 6．最初と最後の頁<br>205--254 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>阿部公彦 | 4．巻<br>2018年4月号 |
| 2．論文標題<br>小川洋子の不安 | 5．発行年<br>2018年 |
| 3．雑誌名<br>すばる | 6．最初と最後の頁<br>174-185 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>阿部公彦 | 4．巻<br>なし |
| 2．論文標題<br>「文体に注意を払って読むとは」 | 5．発行年<br>2017年 |
| 3．雑誌名<br>豊田昌倫・堀正広・今林修編『英語のスタイル』（研究社） | 6．最初と最後の頁<br>140-153 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>阿部公彦 | 4．巻<br>2月号 |
| 2．論文標題<br>「ボブ・ディランの拒絶力」 | 5．発行年<br>2017年 |
| 3．雑誌名<br>「現代詩手帖」 | 6．最初と最後の頁<br>75-79 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>阿部公彦 | ４．巻<br>2016年1月号 |
| ２．論文標題<br>「英語教育」という幻想 | ５．発行年<br>2016年 |
| ３．雑誌名<br>ＵＰ | ６．最初と最後の頁<br>1-6 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>阿部公彦 | ４．巻<br>2015年夏号 |
| ２．論文標題<br>「英語はしゃべれなくていい」は珍説か？ | ５．発行年<br>2015年 |
| ３．雑誌名<br>アステイオン | ６．最初と最後の頁<br>75-90 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計23件（うち招待講演　13件／うち国際学会　4件）

| |
|---|
| １．発表者名<br>阿部公彦 |
| ２．発表標題<br>「ディケンズと事務能力」（シンポジウム「今に生きるディケンズ」） |
| ３．学会等名<br>ディケンズフェローシップ日本支部　2020年度秋季総会　ディケンズ没後 150 年記念大会 |
| ４．発表年<br>2020年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>阿部公彦 |
| ２．発表標題<br>「「叫び」としての言語」 |
| ３．学会等名<br>日本メディア英語学会第10回年次大会（招待講演） |
| ４．発表年<br>2020年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Masahiko ABE |
| ２．発表標題<br>Disgust in the Novel: Natsume Soseki and the Construction of the Modern Subject' |
| ３．学会等名<br>Utokyo-NUT　Joint Conference 2019（国際学会） |
| ４．発表年<br>2020年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>阿部公彦 |
| ２．発表標題<br>「世界で一番英語ができないのは日本人！」という説についてじっくり考える |
| ３．学会等名<br>就実大学・公開学術講演会（招待講演） |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>阿部公彦 |
| ２．発表標題<br>「「らくがき式読書法」から「小説の文体」へ」（シンポジウム「文体とは何か？多角的に考える） |
| ３．学会等名<br>日本文体論学会第115回大会 |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>阿部公彦 |
| ２．発表標題<br>「文学とポライトネス」（シンポジウム「近代・英語・ポライトネス―近代社会で（イン）ポライトに生きること―」） |
| ３．学会等名<br>近代英語協会第36回大会 |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>阿部公彦 |
| ２．発表標題<br>「この英語騒動から見えてくること」 |
| ３．学会等名<br>関西英語教育学会講演（招待講演） |
| ４．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>阿部公彦 |
| ２．発表標題<br>「小説家の英語――大江健三郎は何を受け取ったか」 |
| ３．学会等名<br>中四国アメリカ文学会第47回大会特別講演（招待講演） |
| ４．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>阿部公彦 |
| ２．発表標題<br>「近代小説の「のぞき」と「不機嫌」――ジェイン・オースティンの『高慢と偏見』を中心に」 |
| ３．学会等名<br>日本オースティン協会第12回大会特別講演（招待講演） |
| ４．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>阿部公彦 |
| ２．発表標題<br>「なぜ私たちの英語は「失敗」するのか？」 |
| ３．学会等名<br>成蹊大学文学部スペシャル・レクチャーズ（招待講演） |
| ４．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>阿部公彦 |
| ２．発表標題<br>「「注意散漫」で読むイギリス小説――『ハワーズ・エンド』に「らくがき」するとわかること」 |
| ３．学会等名<br>日本英文学会九州支部大会特別講演（招待講演） |
| ４．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>阿部公彦 |
| ２．発表標題<br>「英語教育をダメにする「売り文句」　ワースト３」 |
| ３．学会等名<br>日本英文学会関東支部秋季大会シンポジウム「どこへ行く、日本の英語教育―改革に伴う問題と将来に向けた取り組み」 |
| ４．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>阿部公彦 |
| ２．発表標題<br>「《日本人は英語がしゃべれない》問題について、英文学的見地からいろいろ考えてみる」 |
| ３．学会等名<br>神戸女学院英語英米文学会講演（招待講演） |
| ４．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>阿部公彦 |
| ２．発表標題<br>「「読解力」とは何か？」 |
| ３．学会等名<br>ワークショップ「これからの「国語科」の話をしよう!――紅野謙介『国語教育の危機』（ちくま新書）を手がかりに―」（招待講演） |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>阿部公彦 |
| ２．発表標題<br>「CEFRの福と災い」 |
| ３．学会等名<br>国際研究集会2019「CEFRの理念と現実」・シンポジウム「CEFRと入学試験をめぐって」（招待講演）（国際学会） |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>阿部公彦 |
| ２．発表標題<br>スピーキング入試でスピーキング力はあがるか |
| ３．学会等名<br>「大学入学者選抜における英語試験のあり方をめぐって」（東京大学高大接続研究開発センター）（招待講演） |
| ４．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>阿部公彦 |
| ２．発表標題<br>The Power of 'Child-like Language and Stories' |
| ３．学会等名<br>2018 Pyeongchang Humanities Forum（国際学会） |
| ４．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>阿部公彦 |
| ２．発表標題<br>漱石作品とおなかの具合 |
| ３．学会等名<br>日本近代文学会（招待講演） |
| ４．発表年<br>2017年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>阿部公彦 |
| ２．発表標題<br>「ゲロの謎」 |
| ３．学会等名<br>日本英文学会関東支部支部大会シンポジウム「病から考える――文学と医療のはざま病と文学」 |
| ４．発表年<br>2016年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>阿部公彦 |
| ２．発表標題<br>「小説家の礼儀作法」 |
| ３．学会等名<br>日本ギャスケル協会第28回大会（招待講演） |
| ４．発表年<br>2016年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>阿部公彦 |
| ２．発表標題<br>「入試問題はなぜ難しいのか？の文化論」 |
| ３．学会等名<br>国際会議「日本という壁」（国際学会） |
| ４．発表年<br>2016年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>ABE MASAHIKO |
| ２．発表標題<br>Panel Symposium on Academic Career Development |
| ３．学会等名<br>The 7th Annual Liberlit Conference for Discussion and Defense of the Role of 'Literary' Texts in the English Curriculum |
| ４．発表年<br>2016年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>阿部公彦 |
| ２．発表標題<br>エクフラシスと情緒不安定 |
| ３．学会等名<br>日本英文学会第87回全国大会シンポジウム |
| ４．発表年<br>2015年 |

〔図書〕　計3件

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>阿部公彦 | ４．発行年<br>2019年 |
| ２．出版社<br>NHK出版 | ５．総ページ数<br>139 |
| ３．書名<br>『NHK 100分de名著　夏目漱石スペシャル』 | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>阿部公彦 | ４．発行年<br>2015年 |
| ２．出版社<br>朝日新聞出版 | ５．総ページ数<br>247 |
| ３．書名<br>幼さという戦略 | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>阿部公彦 | ４．発行年<br>2015年 |
| ２．出版社<br>東京大学出版会 | ５．総ページ数<br>ix+10+286 |
| ３．書名<br>善意と悪意の英文学史　―　語り手は読者をどのように愛してきたか | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---|---|